

52 福聚寺の文化財

所在地：久留米市合川町 2-1

アクセス：西鉄バス「十三部」下車徒歩 10 分

合川町、隈山の林に囲まれて静かなたたずまいを見せる慈雲山福聚寺は、寛延 2 年 (1749) に第 7 代久留米藩主有馬頼僮が、御家安泰などの祈願のために建てた寺です。開山には当時臨濟宗の代表的な僧侶として高名であった日向国佐土原の古月禪師 (1667 ~ 1752) を懇請し、寺領として 250 石などを与えました。以来、明治維新に至るまで有馬家の崇敬を受け続けます。寺にはその間の歴史を物語り、また、有馬家ゆかりの品などが受け継がれており、その一部が県・市の指定を受けています。

52-1 臺子 (盛徳院様没後御寄附)

種別：有形文化財 工芸品 (昭和 55 年 5 月 22 日市指定)

- (1) 黒棚 (真台子) 1 基 (2) 唐金風炉 1 口 (3) 唐金釜 1 口
(4) 唐金水差 1 口 (5) 唐金水次 1 口 (6) 唐金建水 1 口
(7) 唐金蓋置 1 個

の 7 品からなる茶道具です。江戸時代に著された『福聚寺常住器物目録』に「盛徳院様没後御寄附臺子 壺具」と記されているそのものです。

盛徳院とは、福聚寺を創建した有馬頼僮の生母で、その死後、ゆかりの福聚寺に寄付されたものです。釜には有馬家の定紋も施されており、いずれも優れた青銅製品で、当時の格式高い茶道具の好例となっています。



52-2 古月こげつぜん禪師し関係かんけい金工きんこうひん品

種 別：有形文化財 工芸品（昭和 55 年 5 月 22 日 市指定）

古月が福聚寺に入ったのは 84 歳の時で、開山としてあったのは翌年に没するまでの僅かな年月でしかありません。しかし、寺には禪師の厳しい宗教生活や逸話を物語る遺産が残されています。この中で、工芸的にも優れた、次の金工品 3 点が市指定となっています。

1. 白銅製「亡靈謝剃鏡」 1 面

天和元年(1681)に、亡靈から乞われるままに剃髪ていはつに応じた謝礼として、古月禪師が与えられたという逸話を持つ鏡です。秀麗な姿の柄鏡です。

2. 白銅製「朝露の玉」容器 1 合

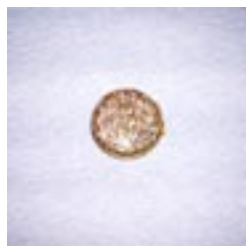
延享元年(1744)福聚寺建設に先立つ寺地選定の際に、古月禪師の膳に朝露が降り、結晶となったために、それを吉祥として寺地を決定したと伝えます。その「結晶」を納めたとする容器です。外側は高肉彫りの彫金、錫板・銀板の内部があり、高い金工技術を示しています。

3. 古月禪師舍利塔 1 基

古月禪師が亡くなると、福聚寺で荼毘だび（火葬）に付されましたが、その際に舍利（仏・聖者の遺骨）は「光彩灼熱こうさいしやくねつ」したといひます。その舍利を納めた容器です。板金を打出し、表面の装飾の毛彫りは高い技術水準を示し、おそらく「朝露の玉」容器と同様に久留米藩彫金師の作と考えられます。



亡靈謝剃鏡



朝露の玉



古月禪師舍利塔

52-3 ^{みつくそく}三具足

種 別：有形文化財 工芸品（昭和 55 年 5 月 22 日 市指定）

三具足とは、^{こうろ}香炉・^{けびょう}花瓶・^{しよくだい}燭台の三種を言い、仏前にそれぞれ香・花・^{とうみょう}灯明を供える用具のことです。この福聚寺の物は比較的大型で、铸造品として高い技術水準を見せています。さらに、いずれにも藩主有馬家の定紋である三つ巴紋が施されています。このことなどから藩の御用鋳物師の作であり、有馬家からの^{はいりよう}拝領品と思われます。

また、寺の古目録には「当寺定附御道具」と記されていることから、寺創建の頃の製作であろうと推測されます。



香 炉



花 瓶



燭 台

52-4 ^{からがねせいとうろう}唐銅製燈籠

種 別：有形文化財 工芸品（昭和 55 年 5 月 22 日 市指定）

総高 112 cm・笠径 45 cm ほどを測る青銅製铸造の燈籠で、今も本堂にその気品ある姿を見せています。^{さお}竿と節部に有馬家の家紋の一つである竜胆車紋が施されており、^{はいりよう}拝領品と思われます。

下から、基礎・竿・中台部・^{ほうじゆ}火袋部・宝珠部が、またその宝珠は水煙部と請花部に分けて別鋳されています。火袋の菊花透かし、全体の細部にわたる堅実な仕上げなど、藩御用鋳物師植木家の作品と窺える作品です。



52-5 ^{ふくじゅう じしよぞうもんじよ}福聚寺所蔵文書

種 別：有形文化財 書跡（昭和 56 年 3 月 5 日 県指定）

52-6 ^{ふくじゅう じもんじよ}福聚寺文書

種 別：有形文化財 古文書（昭和 55 年 5 月 22 日 市指定）

江戸時代の中期頃には、久留米藩内には約 240 の寺院がありました。その多くの寺では、日々の寺務日誌などの記録類が作られていました。また、本寺・末寺、あるいは藩庁とのやり取りの書類・手紙類が綿々と残されてきていたはずでした。しかしながら今日、中世以来の由緒を持つ善導寺や千光寺など多くの寺院から、長い歴史の中で、そういった古文書の多くが失われてしまいました。

このような中で、寺建立以降の^{ほうれき}宝暦年間以後とはいえ、福聚寺に 460 点にも及ぶ一群の古文書が伝来していることは、きわめて貴重な例なのです。本山妙心寺や末寺関係、歴代住職の書留である『^{きつようろく}撮要録』、藩からの達・触や寺からの書上を記した『^{かんべん}官辺帳』など、豊富な内容となっています。

この歴史的な重要性から一括して市指定となりましたが、昭和 56 年に、開山古月和尚に関する古文書と一部墨跡を加えたものが県指定となりました。

52-7 ^{ふくじゅう じ}福聚寺の^{まき}イヌ楨

種 別：天然記念物（昭和 53 年 6 月 24 日 市指定）

昔、参道の両側に門柱として育てられたと伝わります。福聚寺の創建は今から約 250 年前であることから、推定される樹齢からみても福聚寺の歴史を見つめてきたイヌ楨は、貴重な樹木であると思われます。

1 号木（西側）と 2 号木（東側）との 2 本からなり、いずれも高さ 15 m を超える樹勢旺盛な巨木です。



官辺帳 (県指定)



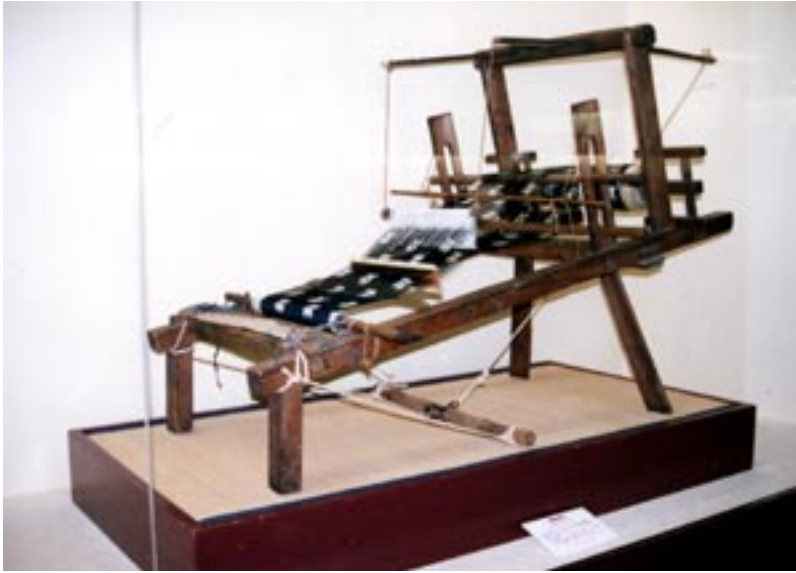
辞令 (就当山後版首座)
(市指定)



イヌ榎 1号木



イヌ榎 2号木



53 久留米くるめかすりばた ぎざり機

種 別：有形民俗文化財（昭和 30 年 3 月 12 日 県指定）

所 在 地：久留米市東合川 5 丁目 8-5 地場産くるめ

アクセス：西鉄バス「地場産業センター入口」下車すぐ

西鉄バス「合川」下車徒歩 15 分

いざり機は、わが国固有の織機で、しもばた下機、じばた地機とも呼ばれていました。この種の機は非常に古い時代から使われていましたが、久留米地方では明治 20 年 (1887) 頃には使われなくなりました。しかし、絹や麻上布などでは、格別の趣があるとして、今なお手織りに使われていることもあるようです。このいざり機は、もともと八女郡広川町在住の田中ナツ氏が所有していたもので、明治 20 年頃に結婚する際新調して持っていったそうです。久留米くるめ織機としては最も古い型式といわれるもので、部品、部材ともに殆んど当時のまま残っています。

54 あげ^{ふね}舟 付^ろ櫓1挺

種 別：有形民俗文化財（昭和 55 年 5 月 22 日 市指定）

所 在 地：久留米市合川町 471-1 合川小学校内

アクセス：西鉄バス「土木事務所前」下車徒歩 10 分

筑後川流域は、過去いく度も洪水に襲われてきました。久留米も例外ではなく、何度も洪水に見舞われました。むかしの人たちは、生活の知恵として、水屋・屋敷森などを考え、洪水に備えました。あげ舟もその一つになります。

あげ舟（上げ舟、揚げ舟）は、吊り舟とも呼ばれ、洪水時には避難・連絡に使用しますが、それ以外の普通の時には納屋や母屋などの土間や天井に、底を上にして木架に掛けていたので、この名前と呼ばれました。



このあげ舟は、大正 5 年（1916）、当時の三井郡合川村が購入し、災害時の児童の送迎用として、小学校に備え付けたものです。全長約 8.4 m、最大幅約 1.4 m とあげ舟としては大型のもので、櫓も 1 本あります。また、昭和 28 年（1953）の水害をはじめ、その使用の記録が残っているのも特徴の一つです。今は、合川小学校の渡り廊下の天井に掛けて保管されています。

近年、水屋などと共にその姿を消しつつありますが、人々の長い間の水との戦いを今に伝えるものです。



55 祇園山古墳 ぎ おんやま こ ふん

種 別：史跡（昭和 53 年 3 月 25 日 県指定）

所 在 地：久留米市御井町 299 ほか

アクセス：西鉄バス「御井町」下車徒歩 5 分

この古墳は、九州縦貫自動車道路の建設に伴って調査された一辺約 25 m、高さ 6 m の筑後地方には珍しい方墳で、筑後地区の最古の畿内型古墳の一つです。

墳丘ふんきゅうには、裾部すそぶと盛土部に 2 段の葺石ふきいしが施され、頂上近くに弥生時代の墓制を受け継ぐ内部を赤く塗った巨大な箱式石棺はこしきせつかんが納められていました。

また、周辺部には、甕棺墓かめかんぼ、箱式石棺墓はこしきせつかんや竪穴式石室たてあなしきせきしつなど 62 基の埋葬施設が見つかっています。

当初は、調査後にはほとんどが壊される予定でしたが、古墳の重要性から保存の声が高くなり、地元でも保存運動が展開され、道路公団が高い技術を投入して擁壁を建設し、墳丘のほぼ 8 割が保存されました。



あんこくじ かめかん ぼぐん
56 安国寺甕棺墓群

種 別：史跡（昭和 55 年 11 月 26 日 国指定）

所 在 地：久留米市山川神代一丁目

アクセス：西鉄バス「野口」下車徒歩 5 分

遺跡は、筑後川沿いの自然堤防上に位置しています。昭和 53 年に東部地区土地区画整理事業に伴う工事中に発見されました。

遺構は、甕棺墓^{いこう かめかん ぼ} 111 基、祭祀土坑^{さいし どころ} 17 基、土壙墓^{どこう ぼ} 4 基、土坑^{どこう} 4 基が調査で確認されましたが、遺跡の範囲が東西 60 m、南北 90 m の約 5,400m² が推定できることから、まだ存在する可能性があります。

甕棺が埋葬された時期は、弥生時代中期中葉（紀元前後）～後期初（1 世紀頃）の間です。

甕棺墓から副葬品^{ふくそうひん}などが全く発見されないことから、身分の差は認められず、まだ共同体の一集団と思われれます。

しかし、甕棺墓と祭祀土坑^{さいし どころ}が並行して発見されたことは、筑後地方における弥生時代の精神文化や生活様式を復元するうえで、極めて重要な遺跡であり、後世に正確に伝えるため、国の指定史跡として保存することになりました。



57 水縄断層 みのうだんそう

種 別：天然記念物（平成9年7月28日国指定）

所在地：久留米市山川町135-3 ほか

アクセス：西鉄バス「旗崎」下車徒歩8分

耳納連山の北麓は急な崖面になっていて、平野から眺めた姿が屏風を立てたように見えることから、屏風山とも呼ばれています。この地形は、久留米～うきは市まで約20kmにわたって認められ、水縄活断層の活動によってできたものです。

この断層は、1000年あたりの平均的なズレの量が10cm～1m以下の右横ズレを伴う正断層とされています。またそれらの断層崖は、急傾斜の谷によって開析されているものの、なお新鮮な崖地形をしており、その形成が比較的新しい時期に起こり、いまなお継続していることを物語っています。

活断層は調査により、4回の活動痕跡が確認され、直近の活動による地割れ充填堆積層に土師器が含まれ、上部が鎌倉時代の遺物を含んだ層で覆われていたことや、筑後地方に残る地震の痕跡・資料などから、『日本書紀』の天武天皇7年12月(679)の条にみえる、筑紫国地震の震源断層であることが判明しました。これは文献に記載され、年代がわかる地震としてわが国最古の地震です。その規模は、M7で兵庫県南部地震に匹敵するものでした。



いちのうえひがしやしきいせき
58 市ノ上東屋敷遺跡

種 別：史跡（平成 17 年 2 月 23 日 県指定）

所 在 地：久留米市合川町 1853-1

アクセス：西鉄バス「百年公園」下車徒歩 5 分

高良山より派生し、筑後川左岸へ向かって延びる台地の東の端に位置します。この台地上では、縄文時代から近世・近代にかけて、連綿と人々の生活が営まれており、市ノ上東屋敷遺跡においても、その痕跡が確認されています。

市ノ上東屋敷遺跡からは、縄文時代の土坑・弥生時代の竪穴式住居や掘立柱建物、古墳時代の溝や掘立柱建物等、奈良時代の土坑、鎌倉時代の溝、江戸～明治時代の神社跡など、様々な遺構・遺物が発見されました。中でも最も注目されるのは古墳時代初頭（3 世紀後半～4 世紀初頭）につくられたと見られる、幅約 1.5m の溝を方形に巡らせた、一辺約 23 m の区画です。この区画は北側中央部やや西寄りに入口があり、内部には溝に沿うようにつくられた柵列と、掘立柱建物 2 棟が確認されています。

一般の集落と隔絶して営まれた方形区画は、儀式や集会を行う公共空間、あるいは豪族居館であった可能性があります。



ちくごこくふあと 59 筑後国府跡

種 別：史跡（平成8年3月26日国指定）

所 在 地：久留米市合川町

アクセス：西鉄バス「土木事務所前」下車徒歩 20 分

西鉄バス「千本杉」下車徒歩 10 分

7世紀末、「筑紫国」が「筑前国」と「筑後国」に分けられました。「筑後国」ができる、国を治める役所「国府」が設置され、それは久留米市合川町一帯に造られました。

「国府」は、政庁を中心に、国司館・役人の屋敷・市場・鍛冶工房などが設けられました。政庁には、都から派遣された「筑後守」と呼ばれる長官や、介・掾・目などの上位階層の役人をはじめ、多数の役人達が勤務し、政治・経済・文化・交通などの拠点となっていました。

発掘調査は、昭和36年（1961）から現在まで実施してきましたが、その結果、3回移転しながら約500年間続いたことが解りました。

第1期国府は、大型の掘立柱建物が整然と計画的に配置されていました。

さらに国府成立の以前にも大きな建物があったようで、筑紫国の時代に国の重要施設があったと思われます。

第2期国庁は、「字阿弥陀」地区にあり、築地塀の中に、計画的に配置された大型建物や、多量の古瓦が出土しています。国庁の南東側で発見された「国司館」は、筑後守（長官）の屋敷であり、調査では築地塀で周囲を囲み、内部に大型の建物が配置されていました。「守館」・「介」と書かれた墨書土器や緑釉花蝶文香炉・硯など識字層の人々や身分の高い人が趣向するものが多量に発見されました。

国の歴史書で延喜元年(901)に編纂された『日本三代実録』によると、元慶7年(883)に大事件が起きたことが記載されています。筑後守都朝臣御西の館を部下達が襲撃し、筑後守を射殺、財物まで略奪したという事件です。出土した土器の年代から、まさにその舞台となったところです。

第3期国庁は、朝妻町にあります。正殿と2棟の脇殿を東西に配置した超大形柱穴の掘立柱建物群が発見されています。出土品として、施釉陶器・陶硯類や越州窯系青磁・イスラム陶器などの外国製品も見られます。中世に作られた『高良記』によると、11世紀末まで国府が存在したことが知られています。

第4期国庁は、現在の市立南筑高校の校庭を中心に発見されています。しかし、建物の配置等を検討しましたが、これまでの第1期から第3期までの国庁とは異なり不明な点が多く残っています。この時期は、貴族政治が衰退し、武士政治が始まったころで、すでに国府の役割が無くなりつつありました。



発掘調査風景

付图 6



60 石橋財団石橋美術館・石橋美術館別館の指定文化財

所在地：久留米市野中町 1015

アクセス：西鉄バス「文化センター前」下車すぐ

石橋美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎氏が昭和 31 年（1956）に、社会公共の福祉と文化向上のためにと、郷土久留米市へ寄贈された石橋文化センターの中心施設として、開館しました。

通常は郷土の生んだ画家、青木繁、坂本繁二郎や古賀春江をはじめとする日本近代洋画の名作群約 120 点をさまざまなかたちで紹介しています。

また、石橋美術館別館は、父正二郎氏が収集した石橋コレクションのなかの書画や陶磁器類の公開と、石橋文化センターの一層の充実を図るためにと、石橋幹一郎氏が久留米市に寄贈され、平成 8 年（1996）に開館したものです。

館内には、書画、陶磁器、工芸品などを中心にいろんなジャンルの作品を紹介しています。最近は、本館、別館あわせた企画が多く開催され、また、地域に根ざした活動も盛んです。

60-1 絹本淡彩四季山水図

種別：重要文化財 絵画（昭和 25 年 8 月 29 日国指定）

作者：雪舟

四季山水は雪舟が生涯をかけて追求した主題で、明に滞在中に制作された《四季山水図》（東京国立博物館）や、帰国後の《秋冬山水図》（東京国立博物館）や《山水長巻》（毛利博物館）などの代表的な作品があります。

《四季山水図》は雪舟が影響を受けたことを認める明の画家、李在の《山水図》（東京国立博物館）と構図が近似していることが指摘されているように、中国浙派の画風を比較的忠実に模しているのに対して、本図は雪舟独特の画風で描かれていて、帰国後の作品と考えられます。ただし、《秋冬山水図》と比較すると画面構成にやや未完成の感もあり、帰国後から《秋冬山水図》へ至る過渡期の作品として位置づけられます。

（参考 石橋美術館別館発行『石橋美術館別館 名作選』）

60-2 紙本墨画禅機図断簡

種 別：国宝 絵画（昭和28年11月14日国指定）

禅機図とは禅僧の意表をついた言動を絵画化し、その絵によって禅僧の教えを説こうとするものです。本作品もその一つで、唐時代の禅僧丹霞（たんか）にまつわる話を描いています。

丹霞は、慧林寺（河南省）在りしとき厳寒にあい、木仏を焼いて暖をとっていた。これを目にした僧侶が丹霞の行動を咎めるが、「仏像を焼いて中の仏舍利を取ろうとしているのだ」と丹霞は答える。僧侶が「仏像に舍利などあろうはずがない」と詰問したところ、「それではこれはただの木に過ぎない、どうして私を責める必要があるのか」とやり返してしまう。

これは、偶像崇拜に対する批判を物語っているといえましょう。

画面中央でたき火に手をかざすのが丹霞。背後の問いに振り返る姿態と表情、そして上から見下ろす僧侶の指先にも二人のやりとりが感じられます。木仏を燃やす動きもまた、何かを物語っているようです。

（参考 石橋美術館別館発行『石橋美術館別館 名作選』）

60-3 ^{てんびょう おもかげ}天平の面影

種 別：重要文化財 絵画（平成 15 年 5 月 29 日 国指定）

作 者：藤島武二

^{ふじしまたけじ}藤島武二の絵画で、古代風の衣装をまとった婦人が^{くわんこ}箜篌とよばれる楽器を手に持ち、桐の木の下にたたずむ姿が描かれています。本作品は明治 35 年（1902）の白馬会第 7 回展に「天平時代の面影」と題して出品されたものです。本作品の着想の事情について、藤島自身が『読売新聞』明治 35 年 10 月 13 日の記事で語っています。それによると、藤島は本作品発表の前年の明治 34 年（1901）に奈良を旅行した際、古代の仏画、仏像を広く見てまわり、正倉院宝物の箜篌を見る機会もあり、箜篌や天平時代にまつわる種々の歴史や伝説に想像をめぐらせ、この作品の着想にいたったということです。ただし、本作品は天平時代のなんらかの史実を再現的に描写したものではありません。天平時代への憧憬をより自由な想像力によって絵画化したものとみれば、「天平時代の面影」という画題も理解できるでしょう。こうした古代憧憬という構想法による歴史主題の絵画化は、青木繁にもっとも実り豊かな成果として継承されてゆきます。

（参考 石橋財団石橋美術館発行 『読む石橋美術館』）

60-4 海の幸^{うみ さち}

種 別：重要文化財 絵画（昭和 42 年 6 月 15 日 国指定）

作 者：青木 繁

明治 37 年 (1904)7 月東京美術学校西洋画科選科を卒業した青木繁は、その夏坂本繁二郎、森田恒久、福田たねらと房州^{ぼうしゅう} (千葉県) 布良^{めら}に写生旅行にでかけます。布良では《海》《海景 (布良の海)》など一連の海シリーズを製作していますが、その中でもこの《海の幸》は横長の画面に漁を終えた漁師^{もり}が銚^{もり}や獲物を担いで歩く様子を、青木独自の大胆な筆致で描いたものです。深く沈んだ海の青、金色の背景、人物をかたどる輪かくの線の赤、これらが相まって幻想的雰囲気をかもしだしています。

その年の白馬会第 9 回展に出品され、前年の《横泉比良坂》^{よもつひらさか}《闇威弥尼》^{じゅいみじ}など第 1 回白馬会賞を受賞した作品に劣らない反響をよびおこしました。明治 30 年代、文学、美術の分野においてあらわれた明治浪漫主義を代表する作品です。

60-5 わだつみのいろこの宮^{みや}

種 別：重要文化財 絵画（昭和44年6月20日国指定）

作 者：青木繁

また、ロマンチックな青木にとって日本神話の世界は、まことに好画題であつたらしく、この種の作品を多く遺していますが、その中でも「わだつみのいろこの宮」は代表作といえるでしょう。

愛人福田タネの故郷、栃木県に寓居中、福田や近所の娘をモデルに、色とりどりの布縮緬^{ちりめん}を画室に下げて海底の幻想に憑かれた彼の筆力には、生々の気漂い、優美な感覚にまとめあげられています。

兄海幸彦の釣針を無くして浜辺で泣いていた弟山幸彦は、海神の導きで海底の鱗^{いらこ}の宮に降り、海神の乙女、豊宝姫の厚いもてなしをうけた。玉器に水汲まんとする侍女にさとられまいとして登り隠れた城門の香樹（ユツカツラ）の下に、絹ずれの音がして現われた乙女子の美しい姿。それは愛する福田タネの幻影でもあったのかも知れません。

明治40年（1907）の東京勸業博覧会で三等賞にしかならなかった憤まんは、雑誌「方寸」に激しい反ばくの文章となって現われますが、皮肉にも唯一人、文豪夏目漱石の感覚だけは彼の天才を見のがしませんでした。それは、小説「それから」の次の一文です。「いつかの展覧会に青木という人が海の底に立っている背の高い女の人を画いた。代助は、多くの出品のうちであれ丈好い気持に出来ていると思った。つまり、自分もああ言う沈んだ落ち着いた情調に居りたかったからである」と。

60-6 とびせいじ かびん 飛青磁花瓶

種 別：重要文化財 工芸品（昭和 25 年 8 月 29 日 国指定）

釉下に鉄斑紋てっばんもんのある龍泉窯りゅうせんの青磁を我が国では「飛青磁」といい、古来より非常に珍重されてきましたが、伝世品は多くはありません。瓶形としては、古くは鴻池家に伝来し、安宅コレクションを経て現在大阪市立東洋陶磁美術館に収蔵される辣蕪形らつきょうの花生はなひげ、その類似としてヴィクトリア&アルバート美術館及びスイスのパウアー・コレクションの作品、そして長頸の作品としては、本作品と酒井家伝来で現在イギリスのディヴィッド・コレクションに収蔵される作品があるくらいです。

本作品は黒田家伝来の品で、保存状態もよく、飛青磁の代表的作品の一つにあげられます。高さ 27 cm

（参考 石橋美術館別館発行『石橋美術館別館 名作選』）

こ きん わ か しゅうまきのだいいちだんかん
60-7 古今和歌集 卷第一断簡 (高野切) (さくらのほな)

種 別：重要文化財 書跡 (昭和 36 年 2 月 17 日 国指定)

『古今和歌集』は、延喜 5 年 (905) に下された醍醐天皇の詔によって撰集された最初の勅撰和歌集ですが、その原本は存在していません。その写本の中で最も古いとされているのが、『高野切本』です。『高野切本古今和歌集』は古くから『古今和歌集』の撰者、紀貫之の筆と伝わるもので、本断簡は、この『高野切本』「卷第一 春歌上」の部分です。

(参考 石橋美術館別館発行『石橋美術館別館 名作選』)

さくらのほなのさかりに ひさし くとはさりけるひとのきたりける ときよみける よみひとしらす あたなりとなにこそたてれさくら はなとしにまねなるひとまちけり かへし なりひらのあそむ けふこすはあすはゆきとそふ りなましきえずはありともはなと みましや たいしらす よみひとしらす ちりぬれはこふれとしるしなきもの をけふこそさくらをらはをりてめ をりとはをしけにもあるかさく らはないさやとかりてはるまては みむ きありとも きん さくらいろにころもはふかくそめてけり はなのちりなんのちのかたみに



こくじんじゃ いしばし
61 五穀神社の石橋

種 別：有形文化財 建造物（平成 12 年 2 月 24 日 市指定）

所 在 地：久留米市通外町 58-1

アクセス：西鉄バス「五穀神社前」下車徒歩 3 分

寛延^{かんえん} 2 年 (1749)、久留米藩第 7 代藩主有馬頼僮によって創建された五穀神社の放生池^{ほうじょう}に架けられた石造反橋です。この神社は藩が運営に深くかかわっており、神殿は久留米藩の 25 人の大庄屋中から、拝殿は総郡中から寄進されました。この石橋も文化^{ぶんか} 3 年 (1806) に総郡中から寄進されたものです。

橋の規模は桁行 5 間、梁行 2 間の石造桁橋^{そでこうらん}です。袖高欄部分を含めば、全長 12.92m となります。

石材は長野石（八女市長野産出の阿蘇凝灰岩）で、築造したのは同じく長野の石工です。江戸時代後期の筑後地方の架橋技術を示すものとして、また、市内では高良山御手洗橋^{きょうわ}（享和 3 年：1803）について古い橋であり、貴重な歴史遺産です。



たかやまひこくろうのはか
62 高山彦九郎墓

種 別：史跡（昭和 17 年 7 月 21 日 国指定）

所 在 地：久留米市寺町 57-1 遍照院

アクセス：西鉄久留米駅下車徒歩 10 分

有馬氏は久留米入城後、各宗の寺院を集め寺町を形成しました。その中の 1 つに真言宗遍照院べんじょういんがあります。山門を入ると、前面に鉄板葺切妻の拝殿があり、その奥に高山彦九郎の墓があります。

彦九郎は、蒲生君平・林子平とともに寛政の三奇人として、当時の徳川幕府を批判し、王政復興を主唱して同志を訪ね、全国を行脚しました。

寛政 3 年 (1791) 7 月中国地方を経て、儒学及び思想を同じくする人々を歴訪して、10 月頃に久留米にきました。この時森嘉膳の所に立ち寄り、翌年に再度来訪しています。その後帰京し、世情に落胆、寛政 5 年三たび 6 月久留米を訪れ、同月 27 日割腹して自決しました。東櫛原町には「終焉の地」が残っています。

墓碑には、正面に「松陰以白居士」、戒名の左右に没年が、左側面には出生地・俗名がやげん彫りで刻まれています。



ひがしくしはらいまでら い せき
63 東 櫛原今寺遺跡

種 別：史跡（昭和 53 年 6 月 24 日 市指定）

所 在 地：久留米市東櫛原町 1286-1 櫛原中学校

アクセス：西鉄バス「櫛原町」下車徒歩 3 分

西鉄久留米駅下車徒歩 10 分

筑後川左岸に形成された自然堤防上や、^{こうせき}洪積台地上には弥生時代の遺跡が多数分布しています。当遺跡はそのひとつで、当時は筑後川を見下ろす台地上にありました。

遺構は、弥生時代前期～古墳時代初期の約 500 年間の、竪穴住居や甕棺墓などが発見されました。弥生前期にあたる円形竪穴住居は、径 6.5m を測り、住居内から前期末の土器とともに、石斧・石^{せきぞく}鎌・石包丁・石剣・石錐・スクレーパー（石匙）・投弾・土製紡錘車・炭化米・丸玉などが発見されました。また、他の住居からは、多量の黒曜石・サヌカイトの石核・^{はくへん}剥片・100 余点の石鎌及びその未製品が発見され、この住居が石器工房的な性格を有していたと考えられます。

弥生中期は、長辺約 4.5m、短辺約 3.5m の方形の竪穴住居に変わり、周辺に甕棺墓が認められます。後期は、長辺約 9.5m、短辺約 6m ほどの方形竪穴住居で、中央に炉をもち、短辺の一方にベッド状遺構を有しています。古墳時代初期は、約 5m × 3m の小形の方形竪穴住居で、4 本の柱で建てられていました。



64 本^{ほん}泰^{たい}寺^じの山^{さん}門^{もん}

種 別：有形文化財 建造物（平成12年2月24日市指定）

所 在 地：久留米市寺町4-1

アクセス：西鉄久留米駅下車徒歩8分

法^{ほう}栄^{えい}山^{さん}本^{ほん}泰^{たい}寺^じ（日蓮宗）の久留米における開創は、元^{げん}和^わ7年（1621）で、安住院日就が有馬家から寺地を拝領して現在に至っています。

当寺は第4世日程の時に寺院が整備され、その時代に山門も建築されたと伝わることから、时期的には元禄年間の建築と考えられます。

この山門は、一間一戸の平唐門で、久留米市内に残る平唐門形式の山門（高良大社中門、梅林寺唐門）の中では最も古いものです。また、基礎・軸部・屋根構造などに禅宗様式を持ち、装飾性が高いことも特徴としてあげられます。

平成11年8月の修理の際に、明治29年（1906）と昭和16年（1941）に修理されていることが確認されました。



65-1 ^{せきじん}石人

種 別：有形文化財 考古資料（昭和34年3月31日県指定）

所在地：久留米市諏訪野町1830-6 久留米文化財収蔵館

アクセス：西鉄久留米駅下車徒歩10分

西鉄バス「税務署前」下車徒歩3分

前方後円墳などの大型古墳では墳丘に円筒埴輪^{えんとうはにわ}、形象埴輪^{けいしょうはにわ}を立て並べますが、筑後や肥後地方を中心とする地域では、少数ながら石で造ったものを立てなければなりません。石人には武装石人、扁平石人、裸体石人などがあります。

この石人は厚さ約15cmの板石に浮彫した扁平石人と呼ばれるものです。片面には靱、反面に人物が彫られています。靱には7本の矢が鎌^{やじり}を上にして挿された様が克明に彫られています。それに対して人物の表現は簡素な表現で表されています。丸い頭部に眼と口があり、大きく開いて肩より高く上げた両腕が刻まれています。



65-2 人物埴輪 じんぶつはにわ

種 別：有形文化財 考古資料（昭和 49 年 11 月 1 日 市指定）
所 在 地：久留米市諏訪野町 1830-6 久留米市埋蔵文化財センター
アクセス：西鉄久留米駅下車徒歩 10 分
西鉄バス「税務署前」下車徒歩 3 分

この 2 点の人物埴輪は、大正 6 年 (1917) 5 月に大善寺町の権現塚古墳ごんげんづかの外堤復旧工事中に、第 1 周堤しゅうていから出土したものです。いずれも頭部のみであり全体の姿がつかめないのは残念です。

1 点は高さ 15.5cm の男性の埴輪です。高さ 9 cm の帽子を被り、縁には帯状のふくらみを持ち、2 本のへらがきちんせんで表現されています。頂部には赤い彩色が残っています。髪は後頭部で左右に分けられており、本来は美豆良みづらを結っていたようです。眉と鼻は貼付け、目と口は表面からへら状のものでくりぬかれています。

他の 1 点は顔面のみで、縦 10.3 cm、横 8.5 cm を残す人物埴輪です。男性埴輪と考えられるもので、目と口は表面からへら状のもので楕円形にくりぬかれ、鼻は貼付けです。

権現塚は 6 世紀前半から中頃の築造とされており、これらの埴輪も同時期の遺物と考えられます。



くるめぎおんさいれいず 65-3 久留米祇園祭礼図

種別：有形文化財 絵画（平成13年3月27日市指定）

所在地：久留米市諏訪野町1830-6 久留米文化財収蔵館

アクセス：西鉄久留米駅下車徒歩10分

西鉄バス「税務署前」下車徒歩3分

『久留米祇園祭礼之図 完』と題された卷子本で、江戸時代の久留米祇園社の祭りを鮮やかに描いたものです。

現在の篠山町法務局西の素盞鳴神社は江戸時代までは祇園社と呼ばれ、久留米城下町の氏神でした。この旧6月の夏祭り「祇園会」は、当時、水天宮の「川祭り」、五穀神社の「御繁昌」と共に、久留米の三大祭礼の一つでした。京都などの祇園祭と同様、各町別当組ごとに出されたひき山が十間屋敷（日吉町）の御旅所までを往復し、町人総出の賑わいでした。まさに久留米町人のお祭りだったのです。

この絵巻はそういった豪華なひき山、町ごとのいでたちをして山車を曳く町人衆や子供たち、祇園社の僧や社家たち、町の有力者と思しき祭を率領する人々、囃子方、警衛に出た武士、そして観衆が生き生きと描かれています。美術的な面からだけでなく、江戸時代の代表的な久留米の祭りの有様と風俗、特に町人たちの姿を今に伝える意味でも大変貴重なものです。製作時期は確たるものはありませんが、18世紀後半から19世紀前半にかけてであろうと推測されます。



ゆき せいぼ せいどう
66 雪の聖母聖堂

種 別：有形文化財 建造物（昭和 62 年 2 月 21 日 市指定）

所 在 地：久留米市津福本町 252 - 1 聖マリア病院内

アクセス：西鉄バス「聖マリア病院前」下車徒歩 1 分

この聖堂は、福岡市中央区の大名町カトリック教会旧聖堂を昭和 60 年 (1985)9 月に聖マリア病院に移築復元したものです。

大名町教会の 4 代目のフランス人宣教師ベレールが設計し、信徒や地元の職人を指導して明治 27 年 (1894) に着工、同 29 年頃完成したと伝わります。

レンガ造りの教会堂としては、旧大浦天主堂 (明治 12 年改築) などについて古く、県下では現存する最古の教会堂です。外観は素朴なロマネスク風のレンガ造り和瓦葺の平屋で、内部は三廊バジリカ式で高又ボールドにより天井を飾っています。

復元は内陣部後壁についてはカッター工法を採用し、当初のレンガ積みを遺したまま構築、瓦・ガラス・床板・天井板などの当初材をできる限り使用して完全復元に近い形で保存されています。



もくぞうあみだによらいゆうぞう
67 木造阿弥陀如来立像

種別：重要文化財 彫刻（大正元年9月3日国指定）

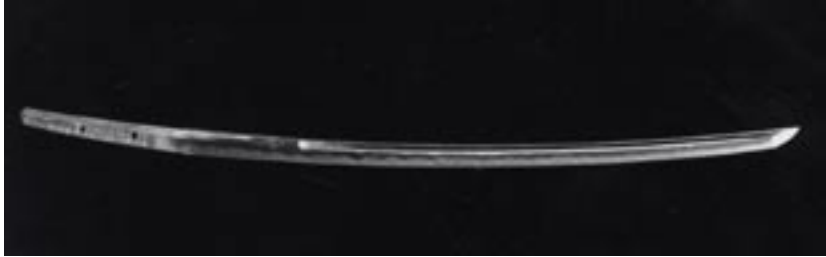
所在地：久留米市本町8-4 無量寺

アクセス：西鉄バス「本町」下車徒歩5分

香林山無量寺は、浄土宗鎮西派に属します。創建は寛永3年(1626)と言われ、寛文3年(1663)頃に現在地に移り、僧貞誉かんえいがこれを中興したとされています。

本尊の阿弥陀如来立像は、鎌倉時代のものと考えられますが、作者は不明です。椀ひのきが用いられ、彫眼・漆箔で、像の高さは122.5cmです。

両手とも肘から曲げ、第1指と第2指を捻せつぼうずる説法印のかたちをとっていますが、これは全国的にも珍しいかたちになります。その構造は、頭体部通して前後二材矧ぎぎで、両腕・着衣の袖の部分に各別材を矧ぎぎ、両手首・両膊部を矧ぎぎ付け袖口にさしています。



68-1 刀 かたな

種 別：重要文化財 工芸品（昭和 33 年 2 月 8 日 国指定）

所 在 地：久留米市 個人蔵

長さ 68.2cm(2 尺 2 寸 5 分)、反り 1.82 cm(6 分)、鑄造り、庵棟、腰反りつき、やや先反り、中切先の優雅な体配です。生ぶ茎の表裏に 2 行の銘がある、長祿 3 年 (1459) の作です。

「備前国長船住左衛門尉藤原朝臣則光 於作州鷹取庄黒坂造」

「鷹取勘解由左衛門尉菅原朝臣泰佐打ス之 長祿三年己卯十二月十三日」

則光は、五郎左衛門尉、応永年間の人ですが、作品は少なく、二代は左衛門尉、長祿、寛正年間の人です。一般に則光は、この二代目を指し、応永備前と永正備前との中間の永享備前と呼ばれ、出来の優れたものが多くあります。

この太刀は、則光の黒坂打として古来からあまたの刀剣書に記載がある著名な刀で、かつて本阿弥琳雅が精魂込めて研ぎ上げたもので、研磨術の典型としても重要なものです。



68-2 ^{たんとう}短刀

種 別：重要文化財 工芸品（昭和36年2月17日国指定）

所 在 地：久留米市 個人蔵

長さ 25.4 cm(8寸4分弱)、平造り、庵棟、やや大ぶりで反りがつきます。茎は生ぶで、目釘孔2個、表に「左」裏に「筑州住」の銘があります。

左は^{げんおろ}元応年間頃(1319頃)の人で、左衛門三郎安吉といい、銘を「左」と一字に切るため、通常「左文字」と呼ばれています。相州正宗十哲の最上位にある名工で、その技は師を凌駕したと室町時代以来の諸伝書に記述があります。太刀で在銘のものは一口しかなく、多くあるのは短刀で、短刀の大家といえましょう。

筑州住とあるように、今の福岡市呉服町周辺に住み、鎮西探題の左衛門に任じられて鍛刀したものといわれています。元は犬山藩主成瀬家の伝来品です。金沃懸地の美しい合口拵が付属し、その金具は後藤徳乗(^{かんえい}寛永8年・1631年没)の作です。

付图 7

